戦旗

一九六〇年八月一六日発行
発行所
新宿区東大久保二の一五五
世界労働運動研究所
編集発行人　鏑木潔
一部　拾円

万国の労仂者団結せよ！
革命的前衛・共産主義者同盟をすべての工場に組織せよ！
共産主義者同盟

ただちに各地で独走支援の行動を！

三池独走の体制つくれ！

代議員のつきあげと民同中闘のどうかつ

炭労第廿七回臨時大会は代議員の、「予想外に」激しいつき上げと、それにたいする民同中闘の「闘えない」というどうかつの中で進んでいる。

第一日、原炭労委員長は、「敵味方の、力関係をさしおいてあつせん案の内容を論じても、始まりません」とあいさつし、太田総評議長は、「私達は、仲間が殺されることをさけるため中労委の仲裁に応ぜざるを得ませんでした。決意だけでこれ以上の戦闘に耐え得るかどうか疑問です」とあいさつして、ともに敵階級の攻撃の具体的な分析と、これまでの闘いの具体的な自己批判をぬきにした「あつせん受諾の、「要求」をした。しかし、午後からの質疑の中では、高島、明鉱赤平、貝島などの代議員から、「中労委あつせん案にたいする予想は手前勝手でなかつたら、会議より早くオルグを減らしたのはなぜか、二万人動員の際実力行使を打たなかつたのはなぜか、現地で勝つたという教宣をしているが勝つていない」などの、批判が集中した。

この批判にたいして第二日冒頭に中執は、「あつせん案にたいするわれわれの態度と今後の方針」を、提案し、あつせん案の「一方的に、独占の言分のみを、通した」ことを確認しながら、「極め手の戦術は今までの戦術では達成されない」「権利闘争、抵抗闘争というところまで割切らなければ闘いが永続きするものでない」「たとえ、社会不安をひきおこす闘いをしても、われわれの目的である労働基本権の確立が保証されるものではない」「炭労の全体制は長期に互つて強力なストを背景に闘い続けられるほど組合員の意識は高まつてはいない」という理由で、政府、中労委、三井資本に若干の「要求」をつけて受諾する、という報告を行なつた。

しかし、午後からの討議では、日炭高松、北炭、明鉱、赤池、明鉱立山などから七月二十日の受諾の誤りと闘争展望の誤りについて激烈な批判が集中した。

炭労中闘は「闘う力がない」ことを強調したが、それは最もロコツな形で、最後に三池木村代議員の発言に対する答弁の中で現れた。

木村代議員は「一、あつせん案は藤林案より悪いものであり、前文の三原則【合理化に対する指名解雇を認める。職場闘争を否定する。争議の暴力化を批判する】を認めることは、十五年間の炭労の闘いの成果を水に流すものである。合反闘争職場闘争について定期大会で検討するというような口実で定期大会に目をそらそうとしている。二、闘う体制がないというが、四月大会だつて闘う体制が特にあつたといえる状況ではなかつた。それは作られるものなのだ。三、闘つても良い案が出ないというが、それ以上悪い案があるだろうか四、三池の弱さの把握は不正確であり、三池はホッパーをとられたら第二に行くものが沢山出るといつていたが、事実は、行く可能性のある人もいないではない、ということが出されていたにすぎない。五、味方の弱点に対する分析はあるが敵の弱点についての分析がない。また弾圧の見透しはどうか」との五点を質問したが、それに対して中執は、「一、弾圧にビクビクしていては、はじまらない。現況ではとにかく自主解決は困難であり、ホッパーをとられれば動揺が起る。二、これ以上悪い案がないといつたが、闘いが続けば権力の介入必至であり、首切り完全撤回はできない。だとすれば千二百人でも六百人でも首切りは首切りで同じことだ。三、大衆のエネルギーがあるというが実態を見ろ」と、まさしくどうかつをやつてのけた。

第三日も、宇部、北炭、三菱美唄から「受諾の条件として要求を出しても受け入れられる保証もないし、敵に完全就職を依頼するなどおかしい。闘う力は、闘いの中でつくられる。池田との闘争を明らかにせよ」などの批判が集中した。この批判の中で、正午で討論を打切つて支部代表者会議に移すという提案が行なわれ、その方向で中闘は議事を進めようとしたが、代議員の討議要求で討議続行が決定された。その討議の最後に、原委員長は再び、敵の攻撃の重大性と、三池を守る体制がない、ことを強調した。

権利闘争を階級的に闘い抜くかどうかだ

大会で極めて明らかに示されたことは何か？第一に、民同が、もはや三池闘争を闘う気が一カケラもなく、あらゆる口実と手段をもつてあつせん案を受諾さすために奔走していること。まさしく彼らにとつては、首切りが千二百人だろうと六百人だろうと、「同じ」であり、「どつちみち勝てない」のだから、早く呑んだ方が良いというわけだ。そこにはこれまでの闘いの真に階級的な具体的な総括も自己批判も何一つない。しかし大会では、同時に、炭労の各支部が、三池の闘いの意義とあつせん案の重大性を極めて深刻に感じており、だからこそ徹底的に中闘のあつせん案受諾を批判し、拒否を要求しているのだ。

炭労中闘は、今になつて、三池闘争の「敵の攻撃の重大性」を強調している。しかしそれは、日本資本主義のどんな運動の中から、どんな階級関係を通じて現れて来ているのかは、まつたく明らかにされていない。一体、三池闘争を長期柔軟に闘つていさえすれば勝つと口をすつぱくして説いていたのは誰だつたか？他ならぬ中闘自身ではなかつたか。そのときこの闘争の「重大性」はなかつたとでもいうのか。その誤つた——いつわりの闘争展望を何らかえりみることなく、今度は闘いが決定的対決に立ち至るとみずからがまつたく動揺して、敵の攻撃の重大性をそれだけとりだして、味方の闘いのためではなく、味方の闘争中止のために、強調するのだ。

安保闘争と共に闘つた三池が、敵階級の攻撃に対して新たな反撃の契機をつかむとき——七月はまさにその時だつた。否、安保価争と三池闘争とが、もつと固く結びつけられ、安保闘争の中で三池を、全労働者階級が生産点で闘う体制をつくりあげて行くことができたなら、七月二十日の敵権力はもつと巨大な力で迎えうたれたろう。それがなかつた上に、決戦体制が解かれ、池田内閣のイニシアテイブの下で、すべてが敵の手中に入つたのだ。

石炭産業の合理化、それを独占ブルジョアジーは、みずからの個別資本の利益のためにもまた、みずからの合理化の遂行のための政治的攻撃として、（すなわち総評最強の部隊を粉砕して日本労働者階級を大巾に後退せしめる攻撃として）も、三井資本を支持し、支援している。この階級的攻撃の日本労働運動にとつての決定的意義をしつかりとつかむことが必要なのだ。

三池の闘いは〔権利闘争〕であると把握せねば闘えない、と中闘はいう。そして続けて彼らは、そう把握しても所詮闘えない、という。たしかに三池の闘いは権利闘争であり、活動家解雇という攻撃は、絶対に譲ることのできない攻撃なのだ。闘わない口実を探すことは階級的裏切りである。闘う条件を、追求し、闘う体制をつくれ！

それだけが必要なのだ。

どんなことがあつても、受諾をきめるな！もし炭労大会が、明確に拒否をきめ得ないとしても、断固として拒否を続けよ。三池のその闘いは、全日本の労働者の支持を得るに違いない。

かつて全電通本社支部三役が処分反対闘争において組合からも除名されたとき、それに反対して徹底的に闘いぬいた本社支部は、全国に数万の「守る会」の支援を得て闘い、遂に四名の不当な処分を撤回させた。

三池の闘いは、何万という労働者の支援のオルグ交流の手で、さらに全日本の労働者階級の支援、人民の支援のなかで闘われたのだから、それは巨大な三池を守る闘いをつくり出すに違いない。

すべての活動家はそのための活動を直ちにはじめろ！三池闘争支持の討議を、決議を、三池現地に、炭労大会に、送れ。金とオルグの体制をつくれ。三池を中心に全労働者の闘いで、敵階級の正面攻撃、あつせん案をけとばせ！

炭労、中闘がどうであろうとのめないものはのめない

炭労大会のゆくえはわからない。民同のどうかつが徹底的に行われるだろう。だが、それを勝たしてはならぬ。

敵階級の正面攻撃に、闘わずして屈することはできない。

炭労大会は、あつせん案を絶対に拒否せよ！

「戦旗」固定購読

お申込みは
新宿区東大久保二の一五五
世界労働運動研究所内
戦旗経営局
定価　一部　十円
月　四〇円　半年　二四〇円

同盟の革命的再生と統一のために

青山　到

創立以来一年数ケ月、同盟建設の過程にあつてわれわれは安保闘争を闘つた。この闘いの経験は同盟を真に革命党として建設する上にとつて極めて多くの貴重な教訓を与えている。

だがしかし、われわれは第五回大会においてその教訓を個々のグループで、個人としてはそれぞれの観点から汲みとり始めたものの組織的には全く汲みとることはできなかつた。だが、同時に、われわれは最も巨大な教訓を眼前にしている。同盟は安保闘争のなかで分解の危機に直面せざるをえなかつた。このことこそ、同盟を革命的前衛党たらしめるための最大の教訓である。この小さな階級闘争＝安保闘争（小さなというのは、この闘争がいかに激烈であつたとはいえ、本当の革命からみれば、ということだ。主観的にではなく、客観的にみるならば）を闘うことによつて分解せざるをえない組織をわれわれは創つてきたという自覚こそ現在極めて重要であろう。

たしかに、われわれは、この安保闘争において理論的、組織的そして肉体的力量を最大限に発揮して闘つてきた。そしてすべての勢力、潮流のなかで最も先進的に闘い、この闘いのなかで、相対的には最も正しい路線を追求した。そして同志樺を喪つた六・一五のような、結果的にはその後の数日間を戦闘化する闘いを闘つた。

だが、安保闘争のみならず、一切の階級闘争の帰結は、闘いの後に決定される。「プロレタリアートが自分の前に開かれた大きな見とおしをながめてまだ、しこたまのしみ、社会問題について大まじめに論議にふけつているうちに、社会の古い諸勢力はより集つて気をおちつけて正気にかえつた」

安保とともに、というより、安保を規定するところの重要な経済的側面としての日本資本主義の体質改善＝合理化攻勢にたいする労働者階級の反撃の焦点である三池闘争は、社会民主主義者の裏切り、反階級的妥協に支えられてブルジョアジーとその政治委員会池田内閣の手によつて絞殺されようとしている。

ブルジョアジーは六・二二ストライキさなかに一九〇六三億円に上る巨額の設備投資を決定した。プロレタリアートを中心としたプチ・ブルジョアジーを含む雄大な人民大衆の昂揚した闘いにもかかわらず、社会民主主義者、スターリニストの裏切りと同盟の絶対的力量の不足の結果として、ブルジョアジーは強引に安保自然成立をかちとつた。そしてその歴史的使命を果した岸内閣のバトンを受けた新しいブルジョアジーの政治委員会池田内閣は、このブルジョアジーの自信に支えられて「低い」高姿勢によつて、安保闘争でのプロレタリアートの「成果」をふみつぶし、自らの側に横取りすることによつて搾取と階級抑圧の体制強化をはかつている。

闘いが高揚し、敵のスケジュールが一時停滞しようとも、彼ら敵階級は闘いの後ですべて横取りするのだ。

われわれがいまなさねばならないことは、この闘いのなかで高揚し、スターリニスト共産党、社会民主主義者、日和見主義と裏切り性を直観的に感じとつた先進的プロレタリアを意識的に自覚せしめ、階級的に結集し、闘いの経験を理論化し、それを組織的に定着させ、次の闘いをより高次の力量で闘う準備を整えることでなければならない。

「プロレタリアートはときどき勝利をうるが、それはほんの一時にすぎない。彼らの成功は、その直接の成果にあるのではなくて、ますます強まりゆく団結である」

闘いの経験は、たしかにプロレタリア大衆のなかに肉体的に蓄積される。それは直線的に高揚するのではなく、資本の蓄積の状況（現在は好況期である）に対応して闘いは前の状態にもどり、現在の如く、既存「指導部」の裏切りが露骨であり、新しい革命的左翼の絶対的力量が不足するときには、先進的部分のニヒリズムすら生むのだ。

六・一八、七・二の闘いは、極めて低調ではなかつたか。岸が引退を表明したとはいえ、傲然と居座り、自分にかわる後継者の選択のドロ仕合を演じていたにもかかわらず。

安保闘争にたいする処分という敵のわれわれの「成果」を簒奪するための攻撃にたいする闘いは殆んど不発に終つた。夏期一時金要求は、殆ん一度のストライキもなく全労と同様の線で妥結した。そして三池である。

そしていま、敵の攻撃の嵐のなかで、すべてが選挙へとむかつている。選挙はブルジョアジー（＝自民党）の勝利に終ることは火をみるより明らかである。

闘いの経験を理論的、組織的に総括し、革命への闘いの力量を強化、蓄積し得るのは革命的前衛組織のみである。

だが、安保闘争のなかで高揚したプロレタリア大衆の先進的部分を同盟自身の分解のなかで、なんら殆んど手を下すことができないのがわれわれの現状ではないか。

そして、先進化した労働者の一部は、スターリニスト党その他のエセ左翼を若干にせよ肥えふとらせている。このことはプロレタリアートの階級的団結を強化するのではなく、日和見主義に固定化することにほかならない。

この冷厳な事実こそ、安保闘争の敗北が語られなければならない危機そのものである。

——裏へ続く——

――表から続く――

（二）

階級的団結強化の決定的指標は、現段階ではいうまでもなく、同盟の理論的、組織的強化以外にはありえない。

だが、現実は、同盟の分解（＝危機）の進行としてある。

戦旗十九号所載の政治局の総括のなかで、安保闘争によってプロレタリアートが「政治的勝利」を獲得したといっている。そして同様のことが、多くの同志によって語られている。特に東大の同志諸君は積極的にそのことを主張している。

だが、なんと微視的、なんと非階級的なことよ。前にのべたようにプロレタリア党は、ひとつひとつの闘いのなかで、そのような現象的で幻想的な「勝利」を探し求めるようなことはしない。革命的力量がどれだけ蓄積されたか、次の闘いのより高次な発展の契機をどのように創ったかということにこそ関心をもつものだ。そしてこのような革命的力量の強化こそが敵にたいする最大の打撃なのである。

また総括のなかでは、「政府危機から政治危機、さらに敵階級の基盤をゆるがす革命的情勢をつくることも不可能なことではなかった」といっている。そして全学連の議案でも同様なことがいわれている。戦旗十五号の主張「岸を日本の李とせよ」のなかでも同様のことが書かれていた。大会討論のなかでも、六・一八を断固として国会突入以上の闘いとして闘っていたならば、「一九〇五年（敗北をあらかじめ予期して）も、可能であったかのごとき発言があった。

だが、安保闘争はそのような闘いとしてもともとあろうはずがなかったのである。わが同盟のなかでは、無限定的な「プロレタリアートのエネルギー保有論」が支配している。プロレタリアートはプロレタリアートであるからこそ資本打倒の物質力がありそのエネルギーをもっている。だが、そのエネルギーの解き放たれ方は、政治経済的危機のあり方によって規定されざるをえない。腐敗した既存指導部の支配をプロレタリアートが許しているのも、なにもわれわれの力が弱いからだけではないのだ。

現在、日本資本主義がその内部矛盾をどのように蓄積し、景気後退にむかおうとも、その矛盾は現象していない。明らかに好況期にある。資本の発展は当然いかなる場合にも矛盾の蓄積とともに進行するのだ。（資本それ自身矛盾的存在なのだ。）

「一般的に好況が支配している場合、すなわちブルジョア社会の生産力がおよそブルジョア的関係のなかで発達しうる限りの旺盛な発達をとげつつある場合には、ほんとうの革命は問題にならない。そうした革命は、この二要素、すなわち近代的生産力とブルジョア的生産形態とが、たがいに矛盾におちいっている時期にだけ可能である。……あたらしい革命は、ただあたらしい恐慌にともなってのみおこりうる。しかし、革命は恐慌と同様現実に起りうる」（マルクス）

「……なによりもまず、このおかげで労働者階級は一八五二年五月における大きな好機を放棄しなければならなかった。……そして最後に……つまり、産業がすばらしい活況を呈していたことがそれであって、失業者が存在せず、よい賃金が支払われている時には、革命はおろか動揺をよび起すことさえできないことは、イギリス人にはよく知られていた。」（エンゲルス）

ここでこのような引用をすることによって何も一八五〇年代の資本主義と現代資本主義が同じだといおうとしているのではない。資本主義の構造的変化がいかにあろうとも、プロレタリアートが資本と賃労働の矛盾的同一性としてあることに変りがない限り、このことは革命的組織と革命家にとって自明のことではないか。

マルクスとエンゲルスが一八五〇年にこのように主張した時、「左翼主義者達」（ゴットシャルフ、ヴイリヒ等）は、このことを認めず、彼らにとってマルクスは、**空しい思索と理論的象徴のために革命を放棄した人間**であったのだ。

マルクスとともに革命的唯物論者であるわれわれは物質的前提を無視して「革命的」精神や「革命的」構えによる「左翼的」行動によって革命が実現できるなどと考えてはならない。ブルジョアジーに対する火のような憎しみをプロレタリア的にもつが故にそうなのである。

「これらの陰謀家たちが革命的プロレタリアート一般にたいする組織化だけにとどまらないことは自明である。彼らの本領は、革命の発展過程をさきまわりし、それを人為的にかりたて、危局から革命の条件がないのにこれをつくりだすことにある。彼らからみれば革命の唯一の条件は、彼らの陰謀的組織の成熟である。彼らは革命の錬金術師であり、むかしの錬金術師の固定概念のなかにあった思想的混乱と偏狭性とを完全に分ちもっている。彼らは革命的奇蹟を行うはずの考案に没頭する。合理的根拠をもたないからこそ、それだけますます奇蹟的に意表外に作用すべき焼イ爆弾、魔術的効果のある破壊器具、一揆を。こういう企みに専心して現存政府の倒壊という手近な目的以外には他にいかなる目的をもたない。そして労働者を波らの階級的利害にめざめさせるというどちらかといえば、理論的啓蒙をひどく軽蔑する。」

「少数者は批判的見地の代りに独断をおき、唯物論の代りに観念論をおく。彼らは現実の条件ではなしに純粋意志を革命の原動力とみなす」

まさにマルクス主義＝革命的共産主義がアナーキズム、ブランキズムと決定的にたもとを分つのはここにおいてである。このように革命的、プロレタリア的見地をつらぬくときに、われわれは主体的力量を十二分に発揮して闘い、その闘いを通じて理論的、組織的力量の革命的強化をはかることが可能だったのである。

もっとも政治局の総括では、その後には、「革命の萌芽であった」とか「若し資本主義の危機が成熟したときには革命……」（こんなことは当り前なことだ。いまさら何を）といっているので必ずしも革命的情勢が作れたと決定的にいっているときめつけるわけにはいかない。だがこのことから総括が現実的な正しい革命的観点から行われていたということにはならない。それはまさに闘いの方針が展望のない不確定な思いつきの戦術（賭）でしかなかったことの裏からの証明である。

そして、闘いの前に、闘いの中で、「安保に同盟の政治的生命をかける」ということがさかんにいわれた。創立わずかにして闘う同盟のひとつの試金石として安保闘争がとらえられたのならばまったく正しい。だが、情勢が**客観主義**的分析に規定され、その上に**主観主義**的に安保闘争がとらえられていたゆえに、学生運動に規定された全同盟の方針によってまさに政治的生命を賭して、同盟影響下のわずかな労働者を労働者階級の基本部隊から切断して編成された孤立した労働者群を学生の戦闘的デモにくっつけ、同盟がプロレタリア党として労働者階級のなかにがっちり根を下すことが妨げられたことを考える時、このような考え方の非階級性と左翼的ポーズにもかかわらず、その右翼的本質がバクロされる。

そして、見せかけの「左翼的」同志たちは、五・一九のブルジョアジーと岸自民党主流派の暴挙に対し、まさに、その後の闘いを質的に規定したであろう革命的、戦闘的闘いを組織することを放棄したことを考えるとき、その「左翼主義」の右翼的本質は一目瞭然となる。六・一五がどんなにその後の闘いの高揚を誘導し、政府危機的状況を現象しようともその本質はなんらかわりはない。

私は安保闘争の総括をここで全面的に展開しようとしているのではない。さきへ進もう。とにかく五・一九の暴挙と岸の居坐り宣言が、プチブルを含むプロレタリアートを中心とした全人民的高揚を呼びおこすであろう情勢を判断できず、右翼的転落と大衆追随に陥らざるをえなかった非階級性のよってくる原因の概観、革命的観点の欠如にいかふくられたにすぎない。

（三）

このような観点は、現在の同盟の情況のなかでは、「右翼的」だとわめく諸君が少なくないかも知れない。だがそのことは、同盟のプチブル急進主義的偏向（みせかけの左翼＝本質的右翼）の大きさを示すものでしかない。

もっと悪いことに、この総括のなかには、**スターリン主義**まで顔をだす。すなわち、「同盟こそが前衛党たりうるという意識性の欠如……」冗談もいい加減にしてもらおう。「共産党のみが前衛党……」というスターリニストのドグマとどこが違うのだ。われわれは「同盟を真の前衛たらしめる自覚性の欠如……」といわなければならない。だが、「言語、は他人にとっても私にとっても現実的、実践的意識である。」スターリニスト的ドグマが自覚的に止揚されていないその理論構造の非革命性の現象ではないか。

そして、大会議案も、総括も含めて、めんめんと「政治的勝利」と自己の方針と行動の「左翼的」合理化が行なわれ、最後は同盟の危機が一般的、抽象的に語られている。そして否定的に総括することによって同盟の革命化をはかるという一般的には正しいが、抽象的で無内容な空語が叫ばれている。

だが、結論の抽象性の故に、ここから政治総括が革命的に行なわれ、同盟の革命的再生の方向が追求されることは、まだ可能であった。大会の討論はそのような革命的方向で進んだか。事実はまったくそうではなかった。大会冒頭に配布された東大意見書によって規定された討論の方向は、徹頭徹尾、政治局の責任の「左翼的」追及とバクロ、自己の「左翼的」合理化でしかなかった。たしかに、政治局は批判さるべきであった。その展望のないルーレット式指導と、それ故に結果した同盟の社学同的「左翼行動主義的」大衆団体化と、理論的、政治的、組織的不統一の原因を徹底的にあばきだし、同盟の革命的再生の方向を明らかにすべきであった。

残念ながら、事態は全くそのような方向には進まなかった。何月何日誰がどうしたという微視的討論（それが全く不必要だとはいわない。しかし「左翼的」＝極左的＝右翼的本質――学生の革命的？行動で安保が粉砕できるという「革命的」思想からの究明では処置なしだ）の繰返しと混乱しか生れなかった。

もちろん、このことによって同盟の深刻な危機がおおいかくされることなく、鮮明になり、同盟の革命的再生にとって極めて大きな役割を**客観的**に果したことは否定しない。そしてこれこそが同盟大会の唯一にして最大（残念ながら）の成果であった。

（四）

それでは、安保闘争の総括はどのような観点からなされるべきであったか。

第一に、一年有半にわたる安保闘争の経過における五〜六月の昂揚局面を総括し、教訓を導きだすためには、ただ単に資本と労働の矛盾という論理から直線的に、無媒介的に安保闘争の個々の局面を規定していくのではなしに、全過程を貫く日本資本主義の政治構造、その中における諸階級諸階層の果した役割とそのもつ意識、イデオロギーの変化を具体的に追及していかなければならない。そしてその中で同盟の果した役割と位置づけを明確にしなければならなかったのである。だが政治局から提出された総括にはこの点が決定的ともいえる程欠如しているが故にこそ、「全学連の英雄的闘争によって二度にわたる労働者階級のストライキを呼び起した」などという事実を無視した論理が平然と横行することになるのだ。五・一九以降の一ケ月間、ついに「民主主義的潮流」を突破することができなかったと指摘し、竹内や日高などの民主主義者を批判することはやさしい。だが、彼らがなぜ一定の無視しえない影響力をもち、「革命的潮流」によって克服しえなかったのかは、政治過程と諸潮流の具体的分析なしには解明しえないし、まして「同盟の絶対的力量の不足」に解消し、同盟の「革命的再建」を無内容に云々することは愚かな論理でしかない。さらに、政治構造と諸階級、諸階層の具体的分析をなすことによってのみ、先にもふれた「安保闘争」の性格が明確に把握されるであろうし、一九〇五年に比するような漫画的論理は粉砕されるであろう。

第二に、同盟の相対的に正しい先進的たたかいが、多くの局面で闘いを前進させ、たしかに決定的ではないが、全局面において一定の積極的規定を闘いに与えたことは否定しない。だがプロレタリアートを中心とする全人民は、同盟の方針で闘ったのではない。明らかに不信と不満はありながらも、エセ左翼連合のヘゲモニーのもとに結集された国民共闘会議の方針によって闘いに進んだのだ。とするならば、同盟の与えた影響も含めて、全過程が客観的（客観主義的にではなく）に浮き彫りにされる必要があった。そしてそれは次のような特殊規定を明確にしうる時期的区分をふまえて明らかにされねばならない。

①、一九五九・四〜十一・二七まで
②、十一・二七〜調印まで
③、調印〜五・一九まで
④、五・一九〜六・二三まで
⑤、現在の結果と展望

この過程における敵の動きと労働者階級の側の諸潮流の状態と方針の解明を含めること

第三に、同盟がどのような観点からこの闘争にとりくみ、どのような方針で、どのように闘ったか、が明らかにされなければならないし、その結果、同盟の現在と革命的強化の方向が明らかにされねばならない。

このようにしてこそ当然次の革命的展望と方針の提出を可能にする基本的総括行がなわれるのである。全同盟員の革命的主体性の確立とこのような総括によってこそ政治局の指導の正否が明らかとなり、同盟の革命的強化が可能であったのだ。

この意味からするならば政治局の大会準備は決定的に不足しており、そして同盟の危機を左翼的アジテーションによって乗り切れるという安易な考えが政治局を支配していたといえるのではないか。結果的に大会の時期は早すぎたのだ。そのように早急にアジテーションによってまとめなければピンチな同盟しかつくっていなかったという責任の所在と当然の自信の欠如を物語っていたといわなければならない。

同盟第五回大会の総括とその討論は明らかに革命的観点と無縁な、まさにプチブルジョア急進主義ないしは無政府主義的傾向を如実にしめしていた。その結果同盟は現在、まったく革命的前衛党確立を目指す革命的組織として存在しない。

一、それは政治局の全同盟からの浮上りと解体、そして無方針の状態として。

二、そして更に、そのことは同盟全体の思想的、理論的、政治的不統一として。

だが、それにも拘らず、主観的革命性とエネルギーは渦をまいて存在する。われわれはこの上に立脚して日本と世界の革命の展望を切り開かなければならない。

現在、みせかけの「統一」を「組織的」に保持する会議をもって同盟の存在を誇示することによってはなんら問題の解決にならない。分解した現実を明確に直視し、対立点を明らかにして、その現実に則し、分派闘争として原則的党内闘争を遂行し、真の革命的分派による同盟の統一が必要なのだ。現在の分解と対立が根本的であることが明らかな以上短期で問題が解決されることはないし、もし「短期間」で解決されたとしたら「虚偽」の統一でしかない。

このような分解の可能性は第四回大会の討論の過程のなかにすでに明らかであったし、さらに同盟第三次綱領草案の無責任な処理、同盟内部に根強く存在する党の論理と大衆闘争（階級闘争）の論理の混同、そこからくる極端なセクト主義など問題を解明する必要があるが、それらの点については稿をあらためて論ずることにしたい。

同盟は、いまやプチブル急進主義党として階級闘争の巨波の中に呑みこまれるか、革命政党へと発展するかの極めて重要な岐路に立っている。これは安易な「統一」や左翼、右翼のレッテルによっては解決しない。

八月六日

（――青山）

もはや幻想はなくなった
だが絶望的気分が……

【現地報告】十九日朝発　十八日現地の空気は大きく変りつつある。……もし炭労大会で受諾の決定が出た場合、おそらく収拾のつかない事態になるのではないか。執行部への不信感も出て来た。一昨日までは受諾は現実の問題としては把えられていなかったが、今日はもうかれらははだにひしひしと感じている。追いつめられた立場から、上の様な（七・二〇申入れをグチとして批判するだけ、酒をのむ）後向きの姿勢が出ると共に、組織とか統一をムシしたはね上り闘争も辞せずの方向も強烈である。三池だけでもドロヌマ闘争にとびこみ何ケ月か持ちこたえれば、全国の労働者も必ず支援するであろう。もし支援がなければはじめて三池は敗北する。しかし絶対にそのようなことはあり得ないという考え方、勝利のことなど念頭になく全闘争をつづけなければ待っているのは奴レイの生活か死かというせっぱつまったギリギリの線から、三池の、孤立も辞せずの態度が出ている。指導部、炭労中央に対する幻想はもはやなくなった。

激電を集中せよ！

〔あて先〕
三井三池労組（三川、四山、宮浦　各支部）大牟田市
三池代表団宿舎　台東区西郷館

水曜会にはいろう

安保闘争で犠牲になった学友たち――一人の学友の死、右眼を失い、あるいはびっこになった学友、起訴されて数年に及ぶ公判闘争をつづける学友――を守るための物心両面の支援体制をつくりつつ、全学連の思想と行動について共に語る共通の場として、全学連救援対策部は「水曜会」を発足させました。

全国の学友諸君、労働者のみなさん、文化人・教授のみなさん、水曜会に入って下さい。

水　曜　会

連絡先は――
東京都千代田区西神田二の十三吉田ビル十八号室
前田弁護士連絡事務所
（三〇二）一一六一〜五
内線十八号室